

大学生による店舗での買い物支援とその教育効果 —主題 C「地域での防犯を考える」での実践—

大久保智生 (教育学部准教授)
皿谷 陽子 (福山大学人間文化学部助手)
西本 佳代 (大学教育基盤センター准教授)
吉井 匡 (法学部准教授)
高山 朝陽 (教育学研究科修士課程 2 年)
田中 晶 (香川県警察本部)
高島 知之 (香川県警察本部)
小野坂裕美 (香川県警察本部)
吉見 晃裕 (香川県警察本部)

1. はじめに

近年、高齢者の万引きの増加が社会問題となっているように、高齢者が加害者になる犯罪に注目が集まってきている。また、振り込め詐欺などの高齢者が被害者になる犯罪にも注目が集まっている。こうした高齢者が犯罪の加害者や被害者になる背景として社会的孤立があることが指摘されている (大久保・石岡・時岡、2016)。これまでに、社会的孤立を背景とした犯罪に対する様々な対策を香川県警察と香川大学が連携して提案・実施してきた。

香川県警察と香川大学との連携事業は、香川県の万引き防止をきっかけに平成 21 年に開始された。万引き防止の成果については、大久保・時岡・岡田編 (2013) や大久保 (2014) にまとめられ、現在も万引き防止の連携事業は継続している (大久保、2019a)。その後、特殊詐欺防止 (大久保・石岡・堀江・垣見・岩田・山地・木村・山口・三好・森田、2016) や安全安心まちづくりの推進 (大久保・有吉・千葉・垣見・山地・山口・森田、2017) など多岐にわたって、連携事業を拡大してきた。現在は、防犯ボランティアの活性化 (大久保・垣見・太田・山地・高地・森田・久保田・白松・金子・岡田、2018) も含めた地域と店舗の防犯活動の活性化を共同で推進している (大久保・山下・田中・高地・吉見・森田・加藤・白松・久保田・金子・岡田、2018)。こうした一連の連携事業の一つとして、平成 29 年度に大学生の防犯活動の理解・促進と未来の防犯ボランティアの育成を主眼とした科目である主題 C「地域での防犯を考える」を香川県警察と立ち上げることとなった。主題 C「地域での防犯を考える」では、これまでにポスターによる駐輪場での啓発の効果の検証や大学の構内の危険箇所の点検、防犯ウォーキングアプリによる地域安全マップ作成など様々な実践 (大久保・米谷・西本・吉井・皿谷・永森・八重樫・田中・高地・吉見・森田、2019) を行っているが、本年度は、大学生による買い物支援とその教育効果について

て報告する。

大学生による買い物支援については、東京万引き防止官民合同会議（2015）が実験プロジェクトとして、大学生による買い物支援コンシェルジュを実施している。この実験プロジェクトは、大学生による買い物支援の実証実験としてわが国最初の取り組みであり、その効果を検証したことは万引き防止の観点から非常に社会的意義のあるものといえる。しかし、その評価は売上額や店内事故発生件数、品減数値の変化に基づいて行われており、買い物支援を行った大学生にどのような変化が起きたのかについては詳細に検討されていない。なお、東京万引き防止官民合同会議（2015）は2014年に実施した『声掛け』の万引き防止実証実験は我が国では初の試みであると思われる」と述べているが、店舗での声かけによる万引きの未然防止は現場の保安員の提案に基づいて、香川では2012年から実施され、その効果について検証してきているため、わが国初では初の取り組みではない。こうした店舗での声かけによる未然防止について、香川県ではどのような声かけが良いのかについても検討を行っており、マニュアルを作成して、多くの店舗で店員教育を行った上で実践を行っている（大久保・岡田・時岡・堀江・松下・高橋・尾崎・藤沢、2013）。そして、その効果については、2013年に店員の意識や売り上げや来客数などの観点から検証を行い、2014年にはリーフレットを作成して広く発信している（大久保、2019b）。さらに、香川県の取り組みに基づいて、北海道でも万引き防止ウイーブネットワークと連携して店員教育を行い、実際に声かけによって万引きを未然に防止した事例について検討し、その効果について検証を行っている（大久保・大木・出村・山名・尾崎・虎谷、2019）。このように全国に先駆けて万引きの未然防止を提唱して実際の店舗において検証してきた香川県であるが、大学生による買い物支援については行っていないことから東京都の取り組みを参考に実施することとした。

大学生が店舗で買い物支援を実施する場合、万引きなどの店舗の防犯対策や高齢者との関わり方について、まず知っておく必要があるといえる。したがって、大学生には、万引きなどの店舗の防犯対策と高齢者との関わり方について講義を受けてもらうこととした。正確な知識を得た上で、買い物支援を行うことが重要であるからである。また、大学生が店舗で買い物支援を行う今回の取り組みは、超高齢化社会の地域の中で大学生が防犯において何ができるのかを考える契機となると考えられる。白松・久保田（2016）の先進的な実践と同様に、地域の社会的紐帯による犯罪防止の重要性を知ること、地域での防犯に様々な形で貢献できることを大学生に理解してもらう契機として、買い物支援を実施することとした。つまり、本実践では買い物支援を通して、大学生が防犯について多角的に学ぶことを目標として、買い物支援による大学生への教育効果について検証していく。

以上を踏まえ、本稿の目的は、大学生による店舗での買い物支援とその教育効果について検証を行うことである。具体的には、主題C「地域での防犯を考える」の中で、講義と買い物支援の実践を通して、大学生の防犯意識がどのように変化するのかを検討する。また、買い物支援を行った大学生が、どのような人に買い物支援が必要と考えているのか、

買い物支援ではどのように関わるのがよいと考えているのか、買い物支援によって何が生まれ、変わると考えているのかについて検討する。

2. 方法

2-1. 参加者と協力店舗

主題 C「地域での防犯を考える」を受講している香川大学生 16 名が買い物支援に参加した。協力店舗は、香川県警察と香川県防犯協会連合会、香川県防犯設備業防犯協力会が連携して認定を行っている安全安心まちづくり推進店舗（大久保・有吉・千葉・垣見・山地・山口・森田、2017）であった。安全安心まちづくり推進店舗のうち、大学周辺の 2 店舗に対して趣旨を説明し、店舗の承諾を得た上で大学生による店舗での買い物支援を実施した。

2-2. 手続き

大学生には買い物支援の実施前に、万引き防止コンサルタントによる店舗での防犯対策に関する講義と高松市社会福祉協議会による認知症サポーター講座の計 180 分を 2019 年 5 月 21 日と 5 月 28 日に受講してもらった。万引き防止コンサルタントによる店舗での防犯対策に関する講義では、万引き防止コンサルタントの伊東ゆう氏が万引き犯罪の現状、店舗での防犯対策について説明を行い、特に高齢者の万引きの特徴や未然防止のための声かけなどについてもふれてもらった。高松市社会福祉協議会による認知症サポーター養成講座では、高松市社会福祉協議会の大川裕子氏が高齢者の認知機能の特徴と高齢者と関わる際のポイントについて説明を行い、高齢者との関わり方についてロールプレイも行ってもらった。受講後に、受講した証として、学生全員にオレンジリングが配布された。

2 人の専門家による講義を受講してもらった後に、高齢者の防犯の意味も込めた声かけによる買い物支援を 6 月 4 日と 6 月 11 日に 2 店舗で行った。買い物支援では、万引きや特殊詐欺対策で最も重要な寂寥感の解消になるように、1 人で買い物に来た高齢者に声かけを行い、買い物を手伝いながら、話すという活動を行った。なお、買い物支援の実施前と実施後に効果検証のための調査を実施した。

2-3. 効果検証のための調査内容

効果検証のための調査内容としては、(1) 防犯意識、(2) 買い物支援が必要な人、(3) 買い物支援の効果的な方法、(4) 買い物支援の効果について尋ねた。(1) 防犯意識については買い物支援の前後で尋ね、(2) 買い物支援が必要な人、(3) 買い物支援の効果的な方法、(4) 買い物支援の効果については、買い物支援後に尋ねた。

(1) 防犯意識

防犯意識については、大久保・米谷・八重樫（2019）で作成された「自己防衛」、「外での防犯対策」、「危険回避」、「油断のなさ」の 4 因子からなる大学生を含めた成人の防犯意識を多面的に測定する尺度 28 項目を用いた。回答形式は「あてはまらない」から「あては

まる」の5件法である。各因子の項目の合成得点を算出し、合計得点も算出した。

(2) 買い物支援が必要な人

買い物支援が必要な人については、「買い物支援が必要な人はどのような人なのかを考えてみよう」という教示のもと、自由記述で回答を求めた。なお、自由記述については、一つだけでなく、できるだけ多くの回答をするように求めた。

(3) 買い物支援の効果的な方法

買い物支援の効果的な方法については、「買い物支援ではどのように関わるのがよいのかを考えてみよう」という教示のもと、自由記述で回答を求めた。なお、自由記述については、一つだけでなく、できるだけ多くの回答をするように求めた。

(4) 買い物支援の効果

買い物支援の効果については、「買い物支援によって何が生まれるのか、何が変わるのかを考えてみよう」という教示のもと、自由記述で回答を求めた。なお、自由記述については、一つだけでなく、できるだけ多くの回答をするように求めた。

3. 結果

3-1. 防犯意識の変化の検討

買い物支援を行った大学生の防犯意識の変化を検討するため、買い物支援前後の防犯意識についてt検定を行った(表1)。その結果、外での防犯対策($t(15) = 2.522, p < .05$)と合計得点($t(13) = 2.394, p < .05$)において、買い物支援後の得点が有意に高いことが示された。以上の結果から、買い物支援によって大学生の防犯意識が向上することが明らかとなった。

表1 買い物支援前後の防犯意識の平均値とt検定の結果

	事前	事後	t値
自己防衛	46.667(6.499)	48.067(8.058)	1.120
外での防犯対策	24.688(8.754)	28.125(9.040)	2.522*
危険回避	10.941(3.848)	12.176(5.151)	1.636
油断のなさ	16.118(2.870)	15.588(3.144)	.919
合計得点	97.786(16.484)	104.286(19.205)	2.394*

注：カッコ内は標準偏差

* $p < .05$

3-2. 買い物支援が必要な人の自由記述の検討

買い物支援を行った大学生が考える買い物支援が必要な人について検討するため、大学生の買い物支援が必要な人の自由記述の内容について、大学教員2名と大学院生1名で討議を行い、カテゴリー分類を行った(表2)。その結果、高齢者、子ども連れ、社会的孤立、その他という4つのカテゴリーが抽出された。「高齢者」が52.5%と最も多く、「子ども連

れ」が 20.0%、「社会的孤立」が 17.5%の順に多いことが示された。以上の結果から、大学生は買い物支援の対象としては、主に高齢者を考えていることが明らかとなった。また、大学生は買い物支援の対象としては、「子ども連れの人」や「社会的に孤立している人」も視野に入れていることも明らかとなった。

表 2 買い物支援が必要な人のカテゴリーと割合

カテゴリー	記述例	割合(度数)
高齢者	1人で買い物をしているお年寄り	52.5(21)
	身体の不自由な高齢者の方	
子ども連れ	小さな子どもを連れの方	20.0(8)
	お子さんを連れの方	
社会的孤立	身寄りがいない人	17.5(7)
	普段話し相手が少ない人	
	地域で孤立している人	
その他	物がどこにあるか分からない	10.0(4)
	物をたくさん買っている人	

3-3. 買い物支援の効果的な方法の自由記述の検討

買い物支援を行った大学生が考える買い物支援の効果的な方法について検討するため、大学生の買い物支援の効果的な方法の自由記述の内容について、大学教員 2 名と大学院生 1 名で討議を行い、カテゴリー分類を行った(表 3)。その結果、「話し相手」、「不信感の払拭」、「負担や困っていることの解消」、「その他」という 4 つのカテゴリーが抽出された。「話し

表 3 買い物支援の効果的な方法のカテゴリーと割合

カテゴリー	記述例	割合(度数)
話し相手	コミュニケーションをとることに重点を置く。	50.0(15)
	話をしながら買い物の目的やどう困っているかを聞き出してサポートする。	
	相手の話をよく聞いてあげる。	
不信感の払拭	不信感を抱かせないようにする。	36.7(11)
	威圧感を与えないようにする。	
	どういった経緯で買い物支援をしているか伝える。	
負担や困っていることの解消	体が不自由な人、高齢者の方には荷物をもってあげるなどのサポートが必要と思った。	10.0(3)
	親の方に子どもの様子を見てもらい、支援する人が品物を探すなど、注意する範囲を分担する。	
	買い物の内容を見るのではなく、困っていることを解決する。	
その他	防犯情報を共有する。	3.3(1)

相手」が 50.0%と最も多く、「不信感の払拭」が 36.7%、「負担や困っていることの解消」が 10.0%の順に多いことが示された。以上の結果から、大学生は買い物支援の効果的な方法としては、主に話し相手となることを考えていることが明らかとなった。また、大学生は買い物支援の効果的な方法として不信感の払拭や負担や困っていることの解消が必要であると考えていることが明らかとなった。

3-4. 買い物支援の効果の自由記述の検討

買い物支援を行った大学生が考える買い物支援の効果について検討するため、大学生の買い物支援の効果の自由記述の内容について、大学教員 2 名と大学院生 1 名で討議を行い、カテゴリー分類を行った（表 4）。その結果、「孤独感の解消」、「買い物時の楽しみ」、「地域の一体感」、「お店／店員の変化」、「万引き防止」、「負担の軽減」という 6 つのカテゴリーが抽出された。「孤独感の解消」が 40.7%と最も多く、「買い物時の楽しみ」が 14.8%、「地域の一体感」が 14.8%、「お店／店員の変化」が 11.1%、「万引き防止」が 11.1%、「負担の軽減」が 7.4%の順に多いことが示された。以上の結果から、大学生は買い物支援の効果としては、主に孤独感の解消を考えていることが明らかとなった。また、大学生は買い物支援の効果として、「買い物時の楽しみ」や「地域の一体感」、「負担の軽減」を考えていることも明らかとなった。加えて、大学生は買い物支援の効果として、「お店／店員の変化」、「万引き防止」を考えていることも明らかとなった。

表 4 買い物支援の効果のカテゴリーと割合

カテゴリー	記述例	割合(度数)
孤独感の解消	安心感、孤独感の解消。	40.7(11)
	コミュニケーションによって、他者とのつながりが生まれる。	
	孤独感が失せ、迷惑行為が減る。	
買い物時の楽しみ	買い物が楽しみになる人がいる。	14.8(4)
	話し相手ができることで、より楽しく買い物をすることができる。	
地域の一体感	地域の一員だという感覚が生まれる。	14.8(4)
	地域の輪が広がる。	
	地域への貢献。	
お店/店員の変化	店内の雰囲気が明るくなる。	11.1(3)
	客と店の信頼関係。	
	サポートする人がいることで、業務に集中できる。	
万引き防止	万引きなどを防ぐことができる。	11.1(3)
	自分は気にされている、見られていると感じるようになる。	
負担の軽減	子どもの世話をしながら買い物や重い荷物をもつなどの負担を減らすことができる。	7.4(2)
	支援が必要な人にとって、負担が少しでも減る。	

4. 考察

4-1. 買い物支援による防犯意識の向上

店舗での買い物支援によって大学生の防犯意識が向上することが明らかとなった。特に、外での防犯対策への意識が向上することが示された。つまり、店舗での防犯対策や高齢者への支援の仕方を学び、実際の店舗での買い物支援を行うことで、大学生の防犯意識も向上するといえる。したがって、店舗での買い物支援は、他者への援助行動ではあるが、援助行動をとりながら、さらに自らの防犯意識も向上させることができるという教育効果のある有意義な取り組みであると考えられる。

4-2. 高齢者への買い物支援の必要性

大学生は買い物支援の対象としては、主に「高齢者」を考えていることが明らかとなった。そもそも高齢者が加害者にも被害者にもならないために店舗での買い物支援を実施していることから、高齢者を店舗での買い物支援の主な対象として考えたことは当然の結果といえる。また、大学生は買い物支援の対象として「子ども連れの人」や「社会的に孤立している人」も視野に入れていることも明らかとなった。子ども連れの場合、高齢者と同じく、一人で買い物をするのが大変であるため、買い物支援の対象として考えたといえる。社会的に孤立している人は高齢者に多いものの、「身寄りがいない人」、「普段の話し相手が少ない人」、「地域で孤立している人」は他の世代でも存在しうるため、買い物支援の対象として考えたといえる。したがって、買い物支援はまず買い物が大変であり、社会的に孤立しやすい世代である高齢者を対象として考えていく必要があるといえる。

4-3. コミュニケーションとしての買い物支援

大学生は買い物支援の効果的な方法としては、主に話し相手となることを考えていることが明らかとなった。これは、社会的孤立が犯罪の加害者や被害者になる背景としてあることから、最も効果的な方法といえ、大学生が犯罪の背景について理解していることの現れといえる。また、大学生は買い物支援の効果的な方法として、不信感の払拭や負担や困っていることの解消が必要であると考えていることが明らかとなった。この結果については、高松市社会福祉協議会による認知症サポーター養成講座の成果といえる。事前に認知機能の低下した高齢者への関わりについて学んでいたことから、効果的な買い物支援の方法として、不信感の払拭や負担や困っていることの解消が必要と大学生が考えたといえる。したがって、買い物支援では、不信感を払拭したうえで、話し相手となり、負担や困っていることを解消していくことが重要であるといえる。こうした方法は気にかけてくれる人が存在していることを示すことであり、単に買い物を手伝うのではなく、コミュニケーションとしての買い物支援が効果的であることを示唆しているといえる。

4-4. 買い物支援による多様な効果

大学生は買い物支援の効果としては、主に「孤独感の解消」を考えていることが明らかとなった。これまで述べてきたように、社会的孤立が犯罪の加害者や被害者になる背景としてあることから、大学生が孤独感の解消を効果として考えていることは、講義や買い物支援の趣旨を理解していることを意味しているといえる。また、大学生は買い物支援の効果として、「買い物時の楽しみ」や「地域の一体感」、「負担の軽減」を考えていることも明らかとなった。つまり、大学生と一緒にコミュニケーションをとりながら買い物をすることで買い物本来の楽しみを享受できるようになり、買い物支援という大学生の地域貢献により、地域の一体感を醸成することができ、さらに大学生が援助することで買い物の負担が減少すると考えているといえる。加えて、大学生は買い物支援の効果として、「お店／店員の変化」、「万引き防止」を考えていることも明らかとなった。この結果については、万引き防止コンサルタントによる店舗での防犯対策に関する講義の成果といえる。事前に店舗での防犯対策について学んでいたことから、買い物支援の効果としての万引き防止が可能になり、買い物支援が店舗にもメリットのある対策であると大学生が考えたといえる。以上のことを勘案すると、買い物支援は、単純に支援される側にメリットがあるだけでなく、支援する側や店舗側にもメリットのあるものであるといえる。

5. おわりに

香川県警察の全面協力の下で連携事業の一環として新設された主題 C「地域での防犯を考える」は3年目を迎えた。1年目は試行錯誤しながらの授業構成であったが、2年目は1年目の取り組みをさらに発展させ、ポスターによる駐輪場での啓発の効果の検証や大学の構内の危険箇所の点検、防犯ウォーキングアプリによる地域安全マップ作成などを新たに実施した（大久保・米谷・西本・吉井・皿谷・永森・八重樫・田中・高地・吉見・森田、2019）。3年目は2年目の取り組みをもとにしながらも、2年目に1回しか行わなかった買い物支援の回数を2回に増やし、その教育効果の検証を事前事後の調査から行ったが、実際に地域の店舗で支援を行い、自らの防犯意識も向上させることが明らかとなったことから、地域志向を目指す大学にふさわしい教育効果があることが示された。

また、本科目でのフィールドワークは、1年目から新聞やテレビ等メディアにも取り上げられ、3年目である今年度のフィールドワークも新聞やテレビ等メディアに大きく取り上げられた。こうした点からも、大学の地域貢献と教育活動のアピールになっていることは明らかである。今後も、香川県警察と連携して、先進的な地域貢献や教育活動を行い、発信していく必要があるといえる。

最後に、大学生の犯罪防止も視野に入れ、将来の防犯の担い手を育成するために、県警察と大学が連携・協働して、15回の授業を行っていくというスタイルは他に類を見ないのである。その中でも、地域の店舗で支援を行いながら、教育効果も得られる本科目の実

践は、今後の地域志向を目指す大学の地域貢献の一つのあり方とその教育効果を示すことができた点で非常に意義のある取り組みであったといえる。

付記

本論文は、科研費基盤研究 (C) 課題番号 17K04421 の助成による研究成果の一部である。

参考文献

- 大久保智生 (2014) 「香川県における万引き防止の取組：万引き認知件数全国ワースト 1 位からの脱却」『刑政』125 (10)、12-23 頁。
- 大久保智生 (2019a) 「子どもの万引きはどのように捉えられるのか」『更生保護』70(3)、16-19 頁。
- 大久保智生 (2019b) 「モデル店舗における集中的な万引き対策の効果：防犯意識とホスピタリティの観点から」『Hospitality：日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌』29、19-28 頁。
- 大久保智生・有吉徳洋・千葉敦雄・垣見真博・山地秀一・山口真由・森田浩充 (2017) 「店舗における地域と連携した防犯対策の評価：安全・安心まちづくり推進店舗の認定を通して」『香川大学教育学部研究報告』148、1-8 頁。
- 大久保智生・石岡良子・時岡晴美 (2016) 「地域と連携した高齢者向け防犯教育プログラムの開発：高齢者が被害者及び加害者にならないための教育」『ジェロントロジー研究報告』12、36-47 頁。
- 大久保智生・石岡良子・堀江良英・垣見真博・岩田健嗣・山地秀一・木村光宏・山口真由・三好弘美・森田浩充 (2016) 「特殊詐欺撲滅ネットワーク会議および高齢者の防犯教育推進のための研修会の効果の検討：地域ぐるみの特殊詐欺対策推進のために」『香川大学教育学部研究報告』146、1-8 頁。
- 大久保智生・垣見真博・太田一成・山地秀一・高地真由・森田浩充・久保田真功・白松賢・金子泰之・岡田涼 (2018) 「香川県における防犯ボランティアの活動内容と課題の検討：ボランティアへの参加動機と援助成果、地域との交流との関連から」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』23、65-74 頁。
- 大久保智生・米谷雄介・西本佳代・吉井匡・皿谷陽子・永森美帆・八重樫理人・田中晶・高地真由・吉見晃裕・森田浩充 (2019) 「主題 C「地域での防犯を考える」における実践と教育効果に関する検証—駐輪場での施錠率向上のための啓発および防犯ウォーキングアプリによる地域安全マップ作成の効果も含めた検討」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』16、109-122 頁。
- 大久保智生・米谷雄介・八重樫理人 (2019) 「地域安全マップを作成可能な防犯ウォーキングアプリの開発 (1) —防犯意識尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—」『日本コミュニティ心理学会第 21 回大会発表論文集』

- 大久保智生・岡田涼・時岡晴美・堀江良英・松下昌明・高橋護・尾崎祐士・藤沢隆行（2013）「万引き防止対策におけるエビデンスに基づく社会的実践サイクル：店舗および店内保安員の調査結果に基づく未然防止のための店内声かけマニュアルの作成とその実施」『香川大学教育学部研究報告』139、35-51 頁。
- 大久保智生・大木邦彰・出村憲史・山名周二・尾崎祐士・虎谷利一（2019）「地域貢献を視野に入れた店舗での万引き対策の実践：北海道におけるモデル店舗事業の成果」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』24、15-29 頁。
- 大久保智生・時岡晴美・岡田涼編（2013）『万引き防止対策に関する調査と社会的実践：社会で取り組む万引き防止』ナカニシヤ出版。
- 大久保智生・山下勝正・田中晶・高地真由・吉見晃浩・森田浩充・加藤学・白松賢・久保田真功・金子泰之・岡田涼（2018）「地域で見守り活動を行うボランティア対象の研修会および店舗対象の防犯 CSR 講習会の効果の検討：地域と店舗の連携による地域防犯活動の活性化のために」『香川大学教育学部研究報告』150、13-22 頁。
- 白松賢・久保田真功（2016）「「学校・家庭・地域の社会的紐帯」による万引き防止の可能性：試行モデル事業による課題探求」『愛媛大学教育学部紀要』63、31-38 頁。
- 東京万引き防止官民合同会議（2015）万引きに関する調査研究報告書：高齢者の万引きに着目して